

地域おこし協力隊通信

第35回



リポーター
高橋将行 隊員



皆さんこんにちは。潮来市地域おこし協力隊の高橋です。今回は、35回目の協力隊通信です。

潮来市に移住して間もなく5ヶ月を迎えようとしています。徐々に知り合いも増え、友人と共に一緒に出掛けることも、おかずの交換をする機会が増え、楽しい日々を送っています。東京に住んでいた頃も、隣人におすそわけをしていましたから、何処で生活しても、齢を重ねても、私の性格・感性は変わらないものなのかもしれません(笑)。

さて、2月末〜3月初旬にかけて、全国各地で雛人形を用いたイベントが開催されていましたね。潮来市、近隣の香取市佐原でも多くの雛人形が華やかに飾られています。実は私、雛人形って大好きでして、この場で少し喋らせてください。

雛人形は、それぞれ顔や表情が微妙に異なり、個性があることをご存知でしょうか。五人囃子の中でも笑顔で横笛を吹く者がいれば、真剣な眼差しで鼓を叩く囃子もいる。また三人官女の中では、口角を上げて二人(お殿様とお雛様)の婚礼を祝う者がいれば、目を細めたすまし笑顔で喜ぶ官女もいる…。そうそう、真ん中に腰掛ける女性は、『既婚者』だそうですね。また、シルエットでいえば、最近の作品は人形自体の顔立ちも幾分ぼつりした印象を受けます。

人形が飾られ始めると、壇上で語らう人形達の表情・ストーリーに見入ってしまうことがあります。『石の蔵』でも長時間居座ってしまい、他の観覧者様から見た私はきつと異常な人であったと思います(笑)

生活風習の変化や事業承継の問題もあり、和人形職人の方々も大変な時があると聞きますが、心意気や技術の詰まった温もりある雛人形をこれからも私たちに届けて欲しいです。そして来年もまた、ごせたら良いなと思います。

まちづくり・潮来の自然と歴史を知る

潮来市の誇れる文化

第134回

硯宮神社

すずりのみやじんしゃ

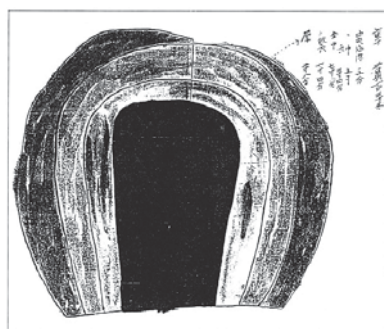
硯宮神社は、地元信仰の場として脈々と受け継がれてきた。その間紆余曲折があつたが、先達の総意努力で乗り越えてきた。現在でも、神社維持管理、そして将来へ伝承する為取り組みを行っている。その中心は三区(将監・新町・後明)から選出された、総代六名の方々である。月二回の神社清掃作業をはじめ、毎年元旦に行われる祈願祭・歳旦祭をはじめとする、多くの祭事催行を取り仕切る。(現在はコロナ禍により規模の縮小、一部中止を余儀なくされている) また、総代会を側面からバックアップする為、氏子会があり会員の皆さんからの浄財(会費)で神社の老朽化した備品の更新、境内立ち木の伐採など環境整備などの立案、実践を行っている。この由緒ある神社を総代会、氏子会と一緒に維持管理し後世に伝えていきたいと思う。

硯宮神社由来

硯宮神社の硯

治承年中、源頼朝が東征の折この地に至り、鹿島神宮に祈願する祭事を書いた。その硯を辻の今宮八幡宮に奉納、のち元禄中水戸光圀が「硯」を見て、これは中国に産する馬蹄石であろうと、神社の神体とし、社名も「硯宮」と改めた。

一説に、頼朝は日頃鹿島神宮を尊崇したが、一流の旗を寄進したときに、この地にあつた古い硯を使って旗に文字を大書した。その時の硯を神社に奉納して神体としたのだという。



辻 硯宮のご神体
(津知尋常小学校偏郷土誌より)

重	一貫百三十
中央海深	五分
〃 中	五寸
長	二寸四分
全市	七寸八分
〃 長	六寸四分
厚	二寸八分

潮来市文化財保護審議会
委員 四ノ宮 巳典

「津知尋常小学校偏郷土誌」
潮来町史編さん委員会
佐藤次男

「蘆邑硯宮之碑」佐竹義能
「茨城の伝説」茨城民俗学会
「徳川光圀と水戸藩領内の出土遺物」
佐藤次男

なお、この「硯」「馬蹄石」は、古墳時代の石枕であることが判明している。